

横

浜と渋谷を結ぶ首都圏の動脈、東急東横線。路線のほぼ中間に位置する日吉駅は、慶応大学日吉キャンパスの最寄り駅としてよく知られている。

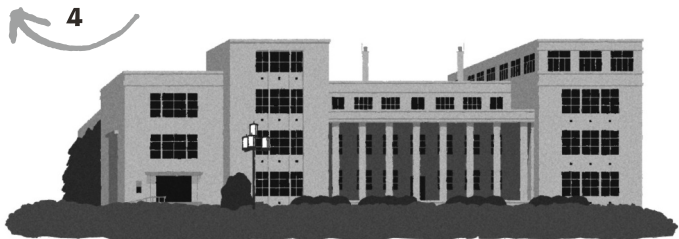
乗降客は1日平均13万8000人を超える。東横線21駅のなかでも渋谷、横浜、中目黒、武蔵小杉に次ぐ5番目の規模の駅として賑わいを見せている。

東横線の歴史は古い。前身の東京横濱電鉄が、まず1926年に丸子多摩川（現多摩川）と神奈川（横浜駅近辺。50年に廃駅）間を開通させた。翌27年には丸子多摩川と渋谷が接続される。路線が桜木町まで伸びて全線が開通したのは32年3月のことだ。

今でこそ東横線は東急の主力路線だが、開通当初はなかなか軌道に乗らなかった。東急の基盤を作った五島慶太は赤字解消に奔走していた。その五島のもとに、慶応大学出身の阪急グループ創設者小林一三から情報もたらされた。「慶応大学が、郊外にキャンパス

若い世代と高齢者の共存へ 横浜・コンフォール南日吉 (2002年・平成14年)

変わる日本の「暮らし」と「まち」



新田匡史

につた・まさお

illustration: Shigeyuki Sakata

用の土地を探している」

◆慶応大学誘致で発展した日吉

慶応大学は、関東大震災の復旧作業が一段落するとともにキャンパス拡張の検討に入る。手狭になった三田から大学予科を移転させる方針が決定される。小林は慶応の機関誌「三田評論」に掲載された塾長の論文を五島に見せた。

「五島くん、東横沿線に天下の慶応大学が来るとなれば、でっかい拾いものだよ」（菊池久著『光芒と闇』経済界）

沿線に大学を誘致すれば、永続的に固定客が確保できる。日本有数の大学が来ることで沿線のイメージは確実に上がる。五島は慶応大学の誘致を即座に決断した。

五島は、日吉駅の東側に広がる約12万坪の土地のうち、東京横濱電鉄が保有していた7万2000坪を無償で提供すると慶応大学に申し入れた。慶応大学は日吉移転を決定し、34年5月、日吉キャンパスでの授業が開始された。

慶応大学の誘致により、のどかな田園地帯だった周辺地区に学生用の下宿やアパートが増えていった。大学と線路を挟んだ反対側の日吉駅西口でも、戸建中心の宅地開発が進められた。

そう語るのには日吉商店街の組合理事長を務める薄井芳夫氏だ。薄井氏によると、開発当初は一区画当たり300坪から500坪という大きさで分譲され、高級住宅地として注目されたという。現在では地価の上昇や住宅地として人気を集める実情を考慮し、区画が細分化されているそうだ。高級住宅地としての名残は、わずかに残る程度だという。

高級住宅地からさらに離れた地区には、手ごろな戸建住宅やアパートが軒を連ねた。大学誘致によるイメージアップにより、日吉には多くの住民が流入し始める。

いをするなど、学生と地域住民の交流も盛んだった。野球部が六大学野球で優勝したときなどは、街全体で祝福したという。日吉には商店街を核とする濃密なコミュニティが築かれた。

◆高齢者支援と地域再生の核に

地元の不動産業者はこう語る。「慶応の卒業生の中には、商店街とのつながりを懐かしく思っている人もいます。就職や結婚をしたあと、この日吉に戻ってくる人もいますよ」

ところが、平成に入ると社宅や寮が売却され、跡地に分譲マンションなどが建設された。若い世代が流入し、一方では戸建の住民の高齢化が進んだ。車社会への移行とともに大型店が登場し、商店街の役割が薄れていく。街全体が変わったと薄井氏は言う。

「アパートで暮らす学生、マンションに入る若い世代、古くから戸建に住む高齢者。日吉の街は三層に分かれてしまったのです」

そんな折、97年度から南日吉団地の建替事業が始まることになった。建替えにあたり、URでは地域住民から広く要望を募った。薄井氏は当時を振り返る。「商店街からも、高齢者のための福祉施設を建設してほしいという要請を出しましたよ」

少子高齢化が進む将来を見据えるURは、地域の声に応えるためにも、高齢者施設を整備する方針を打ち出す。条件を満たす民間企業に、建替えて生じた敷地を賃貸するという。選ばれたのは学研ココファン。高齢者向け賃貸住宅事業などを展開する企業だ。

学研ココファンは、建替事業で再生したコンフォール南日吉の一角に2010年3月、ココファン日吉をオープンさせた。一時金が不要で低家賃の「サービス付き高齢者向け住宅」を中心に、デイサービス、ショートステイ施設なども備えている。

URは採用条件の一つに「近隣住民も利用できる施設を設けるこ

と」という条件も出していた。ココファンのデイサービスとショートステイなどは、団地居住者や地域住民も自由に利用できる。完成して2年という新しさ、送迎も完備する行き届いたシステムを、82歳の薄井氏も歓迎している。「安く利用できる施設に、周辺住民はとても助かっていますよ」

さらに、学研ココファンは建物に学習塾を併設した。塾に通う子どもや近隣の保育園児が、親も含めてココファン日吉でのイベントに参加する。高齢者と交流することで、世代間で分断された地域住民のつながりを再生しようとする試みも始まっている。

子どもたちや若い世代などの地域住民と、高齢者が共存するための場所。コンフォール南日吉は、そんな「地域の核」に発展する可能性を秘めている。



充実する高齢者支援施設の隣接で新しいライフスタイルが生まれる日吉の街

62年になると、戸建地区の南側の地域に団地が建設された。約1300戸からなる、日本住宅公団の南日吉団地である。急速に開発が進む日吉に都心の企業も注目する。通勤の利便性を評価した東芝や全日空などの大企業が、こぞって社宅や寮を建設した。

商店街は戸建、団地、社宅の主婦たちで賑わった。引越しの手伝

街に、ルネッサンス



[企画制作] 新潮社